

イワクラ学論文

神々の理想郷 飛驒の国(後編)

古代道先案内人 昴 崇

飛驒の神話と巨石文化

分水嶺 位山 天岩戸

飛驒の国の中心に位置し、日本海と太平洋の分水嶺でもある位山は、飛驒一宮の神体山として古来飛驒の人々に信仰されてきた。

この位山の山頂部には、三つの巨石で構成された「天岩戸」と呼ばれるご神体がある。

「天岩戸」は、高さも幅も奥行きも、それぞれ四メートルくらいある大きな巨石を正面に配し、それより一回り小さい巨石を正面右に配した巨石遺構であり、その二つの巨石は上のほうでは接し、下のほうでは奥に長い三角形の空間を作り、その空間の地面には、川原石のような大きな石がいくつ配置されている。

二つの巨石によって出来た岩屋の中に、わざわざ石が置かれているのを見ると、あたかもこれが古代の墳墓であるかのような印象さえも感じられてくる。

そして、「天岩戸」の正面左端を



写真：位山天岩戸

見るとそこには長さ四メートルくらい、直径一メートルくらいのがやや細くなった円柱形の巨石が横たわっている事に気づく。

この石は、正面に向ったほうの面が平らになっているので、古代においては天に向かって高々と立てられていた可能性もあるだろう。

飛驒の縄文遺跡には、これほどの大きさではないものの、立石遺構が見つかることはしばしばあり、しかもそれは二本で、大小二本一

組という構造を持っている場合も多い。

このような点を考えていくならば、位山のご神体に立石が使われていることも不思議ではないし、例えば、かつては「天岩戸」正面右端に、もう一本小さな立石が立っていたとか、それが大小二本一組の構造であった可能性も否定できないことであると思う。

ただ、ここまで大きな石が立てられていたとすれば、その存在目



写真：位山天岩戸の立石か



写真：位山祭壇石

的はこれまでの縄文遺跡の立石遺構とは、少し異なったものであるのかもしれない。
ここで個人的な意見をいわせていただくなら、この大きな立石は、ここに葬られた貴い人々の魂を、より確実に天上界へと送るための設備なのではないかと思う。
この「天岩戸」に、いかなる神々が葬られているかは不明ながら、

確かな事は、ここが飛驒の国における最高の聖域であるということである。

なお、位山スキー場のほぼ中央にあたる場所には、ひな壇のような形をした大きな巨石があり、「祭壇石」と呼ばれている。

この「祭壇石」は、おおよそ位山の頂を向くような配置になっているので、古代の人々には位山の祭祀をここで行い、特別なとき以外は神体山へ登らないようにしていたのだろう。

位山は分水嶺であるため、ここからは二つの川が南北に流れ出ている。

そのうち北へ流れる宮川は間もなく高山市外を通り、越中に流れ込む辺りで神通川と名を変え、やがて日本海へと注いでいく。

しかし、この宮川はかつて安河という名で呼ばれていたという伝承がある。

今、高山市街を歩くと、商店街の名は安川とおりとなっているし、安川交番という派出所まであり、



写真：位山

に出すため、天野安河原において八百万の神々が話し合いをする場面が語られる。

安河と天の岩戸ならば、日向の国の高千穂にもそれらは存在しているものの、そこは天孫が降臨した場所なのだから、もちろん高天原ではない事になる。

安河と天の岩戸が共に存在している土地は飛驒地方の他にあるのだろうか。

その、アマテラスが天岩戸に隠れたという話については、邪馬台国の女王卑弥呼の時代に皆既日食が起きたのだとか、いくつかの説があるものの、その一つに、天の岩屋にアマテラスが葬られた、と考える説がある。

実は飛驒国府には、飛驒の人々には良く知られた、語り部のおきなどと呼ばれる人がいて、僕も何度かあったことがあるので、位山の「天の岩戸」がアマテラスの墓であるという伝承は聞いた事がある。

また、その翁によると、高山市江名子町の荏名神社（えなじんじや）は、アマテラスが生まれた場所

所だというのだから面白い。

胞衣(えな)とは、へその緒を意味した言葉なのだから、つまりは高貴な人が生まれた場所だというわけである。

その荏名神社に行ってみると、境内には説明板があり、祭神の名は、愛那能御神と記してあった。

愛那能御神という祭神の名を目にして、胞衣の御神という言葉が浮かんだ。

ちなみに、岐阜県東美濃地方の恵那山にはアマテラス生誕のときにその胞衣を埋めたという伝承が残っており、ふもとの恵那神社はアマテラス生誕の地とされている。

このほかにも恵那地方には、縄文遺跡や年代不明なものまで含めて、柱状の石を二本並べて立てた遺構がいくつか存在しているから、飛驒と恵那の二つの地方をまとめて。胞衣伝承・双立立石文化圏と呼んでみたい気もする。

しかし注意しなくてはいけない事は、アマテラス誕生伝説があるからといって、飛驒や恵那を天皇

家の原郷としての高天原とすることはできないという事である。

今でも、飛驒国府の語り部の翁をはじめとして、天皇家の原郷を飛驒の国だとする意見が、飛驒の少数の人々から聞かれることがあるが、これはもちろん事実ではない。

「古事記」や「日本書紀」は、日本各地の様々な伝承をまとめて編集されたものなのだから、飛驒地方や恵那地方の伝承が、それらの記述に入り込んだ可能性を考えてもよいと思う。

加えて、アマテラスという神の名は、皇祖神や、伊勢地方をはじめとする各地の太陽神を、「古事記」編集の時に一つにまとめて作りに上げた名前なのだとこの説もある。

その説に従えば、飛驒や恵那におけるアマテラスとは、これら地方で信仰されていた太陽神のことになるだろうし、当然ながらその神は皇祖神ではない。

しかも、それは太陽神というよりは、太陽祭祀をしていた司祭者

であるとか、小国家の主長であるとか、優れたシャーマン、つまり霊能者のことであると、考えてみてもよいと思う。

古代の飛驒や恵那の人々は、そんな高貴な人が生まれた場所のことを聖域と考えて、そこにエナと言う地名をつけたのではないだろうか。

さて、位山にはもう一つ大きな謎がある。

それは、この山に生えている一位に木がいつごろに始まった風習なのか判明しないものの、歴代天皇の即位式に使われる笏木の用材として調達されてきたというのである。

一位の木とは、本来「あららぎ」と呼ばれる、木目が細かくて美しい木であるが、この風習にちなんで、王位を示す「一位」という別名で呼ばれるようになったらしい。

さらに、位山を神体とする飛驒一宮が不明だという。
水無神社の主祭神は、尾張一宮のそれと同じであるとか、神武天

皇、御歳神、大国主命の娘の高照姫、などと諸説があるものの、未だにそれが定まらないのは、おそらく、この神社のなぞめいた縁起伝承が大きく関係しているのだと思う。

その縁起伝承は、おおよそ以下のような内容の話である。

昔、位山には両面四手という山の主が住んでいた。

この主は、神武天皇を船に乗せ、雲の波を分け、この山まで連れて来た後、天皇に王位を授けた。

そのため、この山を位山と呼ぶようになり、船を止めた山を船山と呼ぶようになった。

この両面四手と呼ばれる異形の神については、「日本書紀」仁徳天皇六十五年の記述における、飛驒に現れた宿禰という怪物と比較されることが多い。

その宿禰の姿は、身一つに、面が前後に二つ、手が四つ、足が四つと表現され、百姓をかすみて楽しみとしていたため、(河内から遣

わされてきた)將軍の武振熊によつて殺されたという。

神武天皇が本当に位山にきたかどうか、それは不明というしかないが、両面四手と宿禰では面が二つ、手が四つという点で共通しているのので、水無神社の縁起伝承は飛驒に古くから存在していた伝承が「日本書紀」の影響を受けて成立した、とも云われる。

この縁起伝承で注意すべき点は、「日本書紀」では怪物とされている存在が、ここでは神武天皇に位を授けるほどの存在として語られていることである。

一位の笏木献上の由来を説明した話は、この両面四手の伝承しか残っていないため、現代の人々は、それ以上の事実をあれこれと想像するしかない。

ところで、飛驒最古の寺院とも云われる丹生川村の千光寺では、その開創者の名を両面宿禰と呼んでいる。

位山の両面四手、「日本書紀」の宿禰、千光寺の両面宿禰。

これら三つの名前は、それぞれ微妙に異なっているのので、その実像を確かめるためには、言葉の變化を明確に区別して考える必要がありそうだ。

その中でも特に紛らわしいことは、両面という言葉の意味である。

つまり「日本書紀」の編集者は、両面という言葉、怪物の姿の表現として使ったのに対し、古代飛驒の人々は、それを聖山の主や寺院の開創者の名前として使ったのである。

もし、両面という言葉に隠された意味があるとしたら、それは分水嶺を暗示しているのだと思う。なぜなら、分水嶺の主の名前は、両面という言葉が使われているのだから。

現代の飛驒の人々は、両面という言葉を聞くとき、かつて位山の南北を治めた神々の姿を、その深い潜在意識の奥底に思い浮かべているのだろう。

縄文時代と神話時代は、巨石文化によってこの位山で一つにつな

がっている。

飛驒国府

木曾垣内 阿多由太神社

縄文時代中期に始まった飛驒の巨石文化は一体いつ頃まで続いたのか。

その謎をとくカギは、飛驒国府の木曾垣内に鎮座する阿多由太神社にあるような気がする。

アタユタとは、不思議な響きを持った言葉である。

阿多という言葉聞いて、まずは僕は薩摩隼人の氏族名を思い出した。

それユタという言葉は、徳島県から沖繩県にかけての南西諸島では、祈祷師を意味する言葉である。それらの島々では、巫女と書いてユタと呼んでいる。

ちなみに、祭礼の司祭者であるノロについては、祝女という漢字を当てている。

古代からの神域、阿多由太神社の前を流れる荒城川は、丹生川村のお口を源流とし、神域背後の里



写真：阿多由太神社

山は、川をせり出すように岸辺の近くまで迫り、国指定重要文化財の社殿は、川と里山に挿まれた狭い空間に建てられている。

阿多由太神社を巡る風景は、なぜだか僕には、神域にふさわしい風景に観えてきた。

境内に入って最初に目に止まったものは社殿脇の玉垣の中にある立石と、小さな石棺のフタであった。



写真：阿多由太神社立石の一つ

立石のほうは、長さ百二十センチくらいの円柱形をしていて、「神代の旧跡」などという漢字が表面に刻まれており、やや傾いて立っていた。

古代からの立石が、垣内遺跡環状列石のように、石碑に転用されてしまった例を思い出した。

これと同じ漢字が刻まれた柱状の石は、飛騨神岡の大津神社でも見たことがある。

石棺のフタのほうは、本来は長方形であったものが半分に割れて、その片方だけが残ったという感じで、小さなものであった。

そして、境域右手の広い空間に目を移すと、そこには飛騨地方ではしばしば見かける、二本一組の立石遺構が二基、つまり四本立っていた。

その二基の立石は、ともに高い



写真：阿多由太神社立石の一つ

ほうが百七十センチくらいの長さを持つていた。

しかしそれらの立石遺構は、これまで見てきたいくつかの飛騨地方の立石遺構と比べると少しばかり構造の変化があると感じられた。

阿多由太神社の立石の特徴とは、大小二本が並んで立つうち、大きいほうの立石はより高く、小さいほうの立石はより短くなっていることである。

縄文時代中期、飛騨古川の御番

屋敷遺跡においては、大小二本の長さの比率は二対一であり、縄文晩期、飛騨国府の立石遺跡では、二本の長さは同じになってしまっているのだけれど、これら二基の立石は、大小二本の長さの比率がそれぞれ、五対二、十対三くらいで、二本のうち小さいほうの立石が、構造の点で消失していく過程を見ているようでもある。

そんな観点から考えれば、社殿脇の玉垣の中にある一本の立石も、



写真：阿多由太神社玉垣の中の立石

弥生時代から古墳時代、或いはそれ以降の時代における、飛騨巨石文化の一つの形であるとも思えてくる。

ただ、これらの立石や石棺のフタは、必ずしもはじめから阿多由太神社に存在したものであるとは言いきれないだろう。

例えば、江戸時代や明治時代、付近の農家の人々が田畑の中に石が立っていて農作業に不便だから

と言って、立石を阿多由太神社に引き取ってもらったとか、この神社に様々な理由で渡ってきたと考えてもよいと思う。

なお、一本だけの立石遺構は、高山市新宮町の新宮神社でも目にしたことがある。

さて、阿多由太神社には、いかなる目的で造られたのか不明な、独特の遺構がある。

それは社殿に向かって左側、里山の斜面が川岸の平地と接した部分に築かれていて、古代における何らかの祭壇のようでもあり、或いは小さな木造建築の土台のようにも観えた。

正方形に近い形をしたその遺構は、一辺が六メートルくらい、高さは一メートルくらい、川原石と土とを積み重ねて造っているかのように感じた。

そして遺構上部の平地には、四つの石が1辺三メートルくらいの正方形の形に配置してあったので、これこそは建築物の礎石ではないかと思つた。

それからその平地には、長さ百



写真：阿多由太神社本殿脇の積石基壇

いい、もう一つ奥山には頂上辺りに円墳が一つあるのだという。つまりこの遺構は、それらの墳墓に対する何らかの信仰を示したものだという訳である。

山の頂上部や中腹などに墳墓を築く習慣は古墳時代前期の四世紀頃に盛んであったようなので、阿多由太神社の創建年代については四世紀のことだという可能性を考えてもよいと思う。

また阿多由太という言葉からも予想できるように、神社の蔵の扉で見かけた神紋は、薩摩隼人と何らかの関係があるらしい、とのことであった。

その神紋は、神社でよく見かける三ツ巴の神紋に、少し飾りを付けたような、見馴れない紋章だった。

ではなぜ、この山深い飛騨の国において、隼人族の氏神が存在するのか。

その謎を解き明かすことは容易ではなさそうだ。

しかし「飛騨 よみがえる山国の歴史」には、森浩一先生が阿多由



写真：阿多由太神社の神紋

太神社について考察した文章があるので、それを頼りに以下のような仮説を立てて、謎の解明に一步でも近づきたい。

隼人族の中でも名門とされる阿多の隼人は、薩摩半島の南部を拠点としており、天皇家とも婚姻関係を結んでいた。

四世紀頃になって、天皇家の勢力が飛驒に及んでくると、それに

伴って隼人族もこの地に居住するようになり、今の阿多由太神社の地に墳墓を造った結果、そこが隼人族の氏神となって今日に残った。

飛驒が山と王権に組み込まれた年代については、「日本書紀」仁徳天皇六十五年の記述から、それを五世紀のこととする説があるものの、僕の場合は、飛驒地方の古社の祭神や神社伝承などから、それが四世紀のことだという推測を試みたい。

例えば、飛驒最北部に位置する神岡の古社、大津神社。

この神社の祭神は第十代崇神天皇の時代に北陸道に遣わされた四道將軍の一人、大彥命が主祭神となっているので、第十六代仁徳天皇の時代よりも百年以上は古い時代において、大和王権の勢力が、まず最初は北陸から飛驒に入ったことを示しているのだと思う。

飛驒地方の古代には大きな謎があつて、古墳時代の遺跡は分水嶺の北側しか見つからないらしい。

この問題については、北陸道將軍大彥命の存在を考えれば、少し

ずつ謎が解けてくるようにも感じられた。

なお飛驒の伝承では、現在の位山は、かつては阿多野山という名で呼ばれていたという。

今でも、乗鞍岳南麓には阿多野郷、阿多粕、下呂温泉には阿多野川などという地名が残っているのだから、古代に隼人族が居住していた可能性は皆無ではないと思う。

やはり国府町域においても、二本一組の立石遺構は他にいくつが存在しているらしく、そのため加藤宮司は飛驒巨石文化の特質をすでに知っていた。

国府の巨石文化で特筆すべきことは、石の材質と遺構の年代である。

宮司の紹介で、町内金桶地区の白栗家を訪れると、その軒先には、1メートルに満たない高さの立石が二本立っていた。

それらの立石は、もともと田畑の中に立っていたものの、農作業に差し支えるからという理由で、自宅へ移動させてきたらしい。

二本の立石を見て気になったことは、石の材質がそれぞれ異なっていたことである。

これについて所有者は、山石と川石という説明をしてくれたけれど、この二本の立石が二つの異なる場所で採取されたことだけは確かな事実なのだろう。

後日、町内安国寺の郷土資料館において、教育委員会発行の「国府町遺跡詳細分布調査報告書」という冊子を見つけ、巨石遺構からの出土品について調べてみた。

この冊子によると、金桶地区の立石の年代は縄文時代となっていたので、予想に反していなかったが、問題は三日町地区の室家が所有する二本の立石（女夫岩遺跡）からの出土品が須恵器となっていることである。

これによって、飛驒の立石文化は古墳時代まで続いていた可能性が出てきた。

後編 完